

という感じをもっております。

いずれにしてもこういうコミュニケーションを積み重ねていく。特に一番大事なことは学生を通して積み重ねていくということがや

PART-2 「必修・教養ゼミ」をめぐる

学生たちと教養部教員との座談会の記録

(一九九〇年三月二日)

林(司会) 部長から今挨拶をしてもらい

ましたが無秩序にやるわけにもいかないので、まず僕たちが君達学生諸君にどうして、このようによその大学にあまりないような基礎ゼミナールもしくは教養ゼミナールと呼んでいられるけれども、必修のゼミナールというものを君達にやってもらいたいと考えたか。それからそのゼミにはどういう意図があるのか、これはもちろん一年間の間に各先生方から君達の方へお話しもあつたと思うし、おおむね了解しているとは思いますが、つまり僕らの考えかたはこうなんだよということを、少しお話しをしてもらって、それをもとに話し合

いができればと思うので、我々の方でゼミについて充分考えていただいた鈴木先生の方から少しお話しをしていただいて、それをもとに話し合おうと思うので、話しばかり聞かされて退屈かもしれないけれども、ちょっと辛抱して下さい。では、鈴木先生よろしくお願

はり一番大事なんじゃないかというふうに私は思いました。今後とも皆さん頑張つてやっていただきたいと思えます。以上です。

司会 どうもありがとうございます。

いします。

鈴木(勇) 経営学部

の学生諸君、それから経済学部の学生諸君の皆さん、二五人ずつの皆さんに私共が一人ずつ分かれて一緒にものを考えていこうというところで、この必修ゼミナールというものが設けられたわけでありすけれども、それは私が教授会のご意見を拝承して理解した限りでは二つないし三つくらいの狙いがあつたと考えております。

その第一は、大学での皆さんがなさる学問研究というものは、皆さんが小学校から高校まで受けておられた教育、こういうものとは根本的に違うわけでありまして、その違いを皆さんに悟っていただきませんと大学四年間の皆さんの研究、それから我々が皆さんに学習の素材を提供する、いわゆる教育といつてもいいかと思いますが、それが成り立たない。そこを一つ皆さんに納得していただ

こうということであつたわけです。その狙いというのはどういうところにあるかというところ、第一の狙いはもう少し中味について申し上げますと、どういうところにあるかとい

と、ここまでの教育は皆さんが経験の通り先生から教えられた事柄をよく記憶しておく、そういうところにとどまったんだろうと思うんですね。ところが大学での勉強というのはすでに研究でございまして、ここで獲得されるのは単なる知識ではなくて認識である。それを獲得するということは皆さんが我々教養の授業において聞き取られたところを素材にして、皆さんご自身が科学的な認識を自分で分でもって形づくる、そういう、普通使われる言葉ですと主体的ですとか、積極的、あるいは自主的、そういうような精神の構えでございまして、科学的認識というものは自分で形づくることができない。自分で形づくらない認識というものは、真の認識というところではない。そこを先生方のおひとかたおひとかたのご研究の素材を使われまして、そして皆さんに理解していただく。これが必修ゼミの第一の狙いであつたと思

%うまくいったかどうかというのは、私共が反省しなければならぬところでありますけれども、そういうことがまず第一に申し上げたいことであります。

しかし、同時に私共若い教師だった頃、先輩の先生方から教えられたことでありますが、目的意識をもって学問をしてはならない。つまり、学問というものはなんらかの目的に対する手段としてはいけないと、こういうことを教わったわけでありました。このことは私共の日常生活というものは、非常に多くのなんらかの目的に対する手段として営まれている。これに對しまして、皆さんの身につけるべき先程の学問研究のタイトルというものは楽しいものでなくてはならない。教育というものが、あるいは学習というものが苦しいということが、これは教育学習の本質に反することでありまして、楽しいからこそ認識が自分の身につく、また認識を自分で形作っていくことができるわけで、このことは単に私が申し上げているだけではなくて、私の尊敬する二人のえらい教育科学者が、もうすでにいっているところでありますけれども、そういう意味あいだで学問をするということは同時に楽しくなくてはならない。その楽しさというのは、それは確かに皆さんが学問研究すると同時に、サークル活動をする。あるいは部活動をする。あるいは友達をたくさん作る。よき友を得て、

そして楽しい大学生活を送るということもありましょうけれども、もう一つは学問研究というものを先程申し上げましたように、目的に対する手段として行なわない。

つまり楽しいものとして行なうためには学問するということが、遊びでなくてはならないわけですね。遊びといえますと、皆さんはチャランポランにやっているとだと思われ、かもしれないけれども、先程申し上げましたように、我々の日常生活というのは目的に対する手段、このことがどういう目的に役に立つか、こういう考え方で満たされておりますが、そういう日常生活から脱却させると、その遊びの世界に入れないわけです。だから遊びというのはおそろしく真剣な世界であるわけです。そういう意味あいだで学問というものは遊びであるけれども、しかし非常に真剣な遊びである。だが、遊びであるがゆえに楽しい。こういう学問研究も楽しいでありますし、それから大学生活の他の活動も楽しい。それができるような作業をこの必修ゼミでやろうということが、もう一つ狙いとしてあったと思います。

それから皆さんは四年たちますといやおうでも実社会に出ていかなければならない。といってなんらかの地域社会、それが札幌であるかもしれないし、北海道の別のところであるかもしれない、あるいは本州のどこかであ

るかもしれない。あるいは外国のどこかの国であるかもしれない。とにかくそれは地域社会である。地域社会でありますけれども、これは大なり小なり国民社会の一部でもあります。さらに大きくいえば、人類社会の一部でもあるんですね。そうしますと皆さんは四年たちますと、いやでもおうでも地域社会であり国民社会の一部であり人類社会の一部であるところで、それぞれ、あるいは経済の領域であるいは法律なり政治なり等々の領域で、責任を果たしていかなければならない。何に對する責任かといえ、地域社会に對する責任であり、国民社会に對する責任であり、人類社会に對する責任でもあるわけです。そういうような責任を皆さんが一人一人もう四年後に果たしはじめるべきものとして、負って

るんだということをやはり何らかの素材を使って、それが先生方ご自身のご研究でもあるかもしれないし、あるいはそれ以外のものでもあるかも存じませんが、それを素材に使いまして皆さんにその責任を自覚していただく。これもこの必修ゼミの一つの大きな目的だったと考えております。

それから別に一、二、三、四と順序をつけたからどっちが高い、低いということではありませんで、全部が同様に重要なことで、第四番目の狙いとして申し上げます、それは皆さんにより一層の文章表現能力ですね、つま

り自分が頭の中で考えた思考内容といえますけれども、思考内容を的確に美しく文章で表現する。そういう能力をより一層つけていたきたい。こういうための皆さんに勉強の作業をしていただく。これが四番目にあげられるべき目的であると私は考えております。

私も及ばずながらその線にそって努力しましたけれども、非常にゼミナールは一面において難しい点をもっておりまして、果たして皆さんにお役に立つように運ぶことができたかどうかは、私個人は疑っております。その点においては皆さんに大変申し訳なかったと考えております。その点は私自分が担当しましたゼミの諸君に最後にお詫びをしておいたことでございますけれども、そういったことが狙いであったと、これにつきまして司会者の林先生からお話がありましたように、皆さんのそういうような必修ゼミの目的でよかったのか悪かったのか、あるいはそれを実現していくその方法、あるいは方策というのが適当があったかどうかですね。その他いろいろな点について皆さんのご意見をお伺いしていただければ大変ありがたいというふうに思います。どうも長くなってしまうかもしれません。

林 ありがとうございます。今お話ししたような形で僕らのサイドとしては教養ゼミナール、いわゆる必修が必要だという認識の

もとに今年からははじめたことになるので、君達はその第一回生なわけで、ある意味ではまだ未完成のモルモットにされてしまったという面もあるんだけれども、やはりいままでは大学の授業とか講義というものは上から君達に話を聞かせるという形でしかやってこなかった。しかし時代も変わってきてるんだし、それではとてもだめなんでやはり僕たちがやっていることが果たして君達に充分わかってもらえてるのかどうか、そして君達も意見をいってもらって、そしてよりよいものを作っていく時代になっていくわけだから、ただ偉そうに我々が高いところから話を聞いている態度だけではもうだめだろうという僕たちの反省があって、こういうものを作ったわけです。ただし、さっきから鈴木先生が言われたようにともかく未完成のものだから、やっている我々も不安があるし、それと同時にそういう不安が受けている君達の方にも多かれ少なかれ反映しあって、非常にうまくいったケースもあればどうもうまくなかったケースもあり得るわけです。そのうまく先生との出会いがはたされて、それがあつと四年間ここで残るような形であつてほしいと我々考えてただけけれども、それは僕たち自身の問題もあつて、うまくいったかどうか非常に心配なわけです。

それで我々だけで話し合ったけれども、も

っと重要なのは君達が直接にこうしてほしい、ああしてほしい、あれはまずかった、あれはよかったという意見を聞かせてくれるのが、我々にとってはうれしい参考になるわけです。そんなことを言っていたいきなり意見を言えっていったって、頭ごなしになんかでないだろうけれども、概してどうだったんだろうか。ザックバランにいつてこうやって、僕らの前でもおもしろくなかったと言えいっても無理かもしれないけれども、どうだったのかな？ A先生にあつてよかったとか、どうも林先生じゃ、とてもじゃないが来年もあれじゃあたまらないとか、いろいろあるだろうとは思うんだけれども、まず僕から聞くけれど、お互いにゼミナールがあつたんだけれども、そのゼミナールで一種の友達ができたということもあるだろうが、他に自分の同級生なり友達なりが、例えばA先生にいったら、自分がB先生だったということがあつて、お互いにそういう機会にあのゼミではこうだった、あのゼミではこうだったという話しなんて皆して比べてみたことなんかあつた？

それに統計をみると、前期非常に出席率がよかったものは後期ガタッと悪くなるとか、非常に波がある。ということは、前期で終わったような気がしたのかな、みんな。前期ひととおり、気持ちのがのっているうちはちゃんとでただけけれども、一応前期の先生は

前期の先生で結末をつけるわけだ、そのあと夏休みがくる。そうすると新たにはじめるという時に、気がぬけるとかそんな感じだったんだらうか。それとも前期の先生が大変よかったので、お慕い申し上げてとてもじゃないが後期はだめだと。ただ、今日来てくれた人達は割と出席率がいいほうだと思うので、ちょっとその意味では君達の経験を延べろといっても無理かもしれないけれども。

学生 教養ゼミという仕組みは小学校の頃からホームルーム会議と似たように、そういう雰囲気です。育ってきた私達には、そういう何かあった時に頼れる先生がいるというのはいい仕組みだと思います。だけど、つまらなかつたということは別にないんですけれども、いつも違うことをやっただけで変化があつてよかったんですけれども、人がいなかったせいもあるかもしれないんですけれども。

林 今一つ盛り上がりがなかった？それは、弁解になるけれども、経済学部、経営学部、外国語学部とそろって成り立ちが違う、構成要素が。例えば男の子ばかりを固めているような経営、経済であつて、男女が半々ぐらいの外国語。こうなってくるとだいたい要素が違ふわけ。それやこれやでうまくいかない面とうまくいく面と両方ある。そういう個性がちょっと違うので、Aちゃん達はあれだったけれども、男の子が圧倒的に多かった経営、

経済のゼミはどうだったんだらうか？どうだいい？名前知らないけれど、君はこのゼミだ？そうすると前期が経営で、後期でB先生だったわけか。ちょっと聞かせてくれないか。

学生 僕が思ったんですけれども、どうせゼミでやることはレポートの書き方とか、他の先生が教室にいないようなショールームでやるだけなら、どうせなら経営学部の先生と一般教養の先生に分けないで、一年を通して一人の先生にやつてもらった方が、学生にとってはやりやすいような気がします。

林 経営の先生とB先生のゼミだったわけだな。そうすると例えば出席状況なんかやつぱり前期と後期でかなり差がでた？

学生 前期の経営学部の先生が休講が多くて、すぐ終わったりしたので、後期のB先生のゼミはあまりみんななくなったりして。

林 やっぱリトータルで一年間一人の先生についた方がいいと思つた。それでは君。ゼミはどこだった？C先生ということは、ロシア語科？

学生 せっかく半分くらいまでいって、先生とも仲良くなったのに、また後期になつたら違う先生で・・・一年を通してやつたほうがいいと思います。

林 あと、僕も前期ロシア語科をもつただけだけど、そうするとロシア語科の場合だと、前期スタートしてもかなり出席率が悪かつた。

さりとて後期の英語がよかったとも言えないんだけれども、やっぱり総体的に他の経営経済に比べると出席率がよくなかつたわけだ。

それは同じような感じだった？出席率の問題は、君達は前期後期どっちだった？C先生は、前期。そうすると前期と後期と比べて出席率が変わつたという感じがあつた？やっぱり後期の方が減つただらう。それも男性諸君の方が悪くなつていっただらう。だいたい通弊なんだな。次第にコッ覚えてくるというのか。朝起きられなくなるというのか、そのケースが多いようだな。

それじゃ、隣の彼は？ロシア語科？クラスが同じ？それじゃ似たような感想かい。

彼はどこだい？経済というと前期後期とも教養の先生だな。A先生が後期かい？前期、後期はD先生。感じたこと、考えたこといつてくれないか。

学生 前期はA先生で、一番最初からけっこう楽しかつたので、二三人で、ぱつとかたまって楽しい仲間みたいな、すぐ友達みたいなものできて、よくて出席率もよくて、前期出席率がよかつたのは、A先生がとても早く終わるんですよ。一応やることはやつて、ぱつと早く終わるんですけれども、今度D先生になつたら時間が遅いんです。あまりにも遅いんですよ。それで長いものだから・・・D先生にかわつて、一回目は早く終わるんだらう

うと思って出たんですけれども、一発目から先生遅かったものだから、次の週から激減で、最後の週には一ケタまでいった。最後は自分の単位が心配になって、けっこう楽しかったというか、高校で一番最初大学に入るのに、あまり大学というのは個人というか、そういうのが多いと思うんですね。高校だったら同じクラスで友達がいってその中でワーワーやっていればいいけれども、大学はあの人はある人、自分は自分みたいなのが多いので、俺は友達がいまいけないとダメなので、そういうのでいうとクラス単位でやったのはよかった。

林 隣の彼は同じゼミか？彼にいいたりなかったことは何かないか。

学生 出席率なんですけれども、先生によって言うことがかなり違うみたいで、先生によつては来たくないやつは来なくていいっていう先生がいるらしくて、それで一言いったとたんに、人数がガタンと減って、三人しかいなかったという話しも聞いたことがあるから。

林 僕も間接的に聞いた。

学生 先生がこななくてもいいって言ったなら、こななくても単位くれるんじゃないかと思うんですけれども、しまいには先生から・・・。

林 ただ、出席率は例えば全体の三分の二以上とか、それからちゃんといわれた課題を

消化すれば単位を落とすことはないよ、という言われ方したのが多かったはずだけれども、なかにはそうでないのもあったようで、確かにあったようだな。それからなくていいよといいいながら、いざとなったらやっぱりこいよ。単位ださんぞ、これじゃ脅迫だという説もあったな。

それじゃあ今度はそちらの女性軍。

学生 前期はE先生で。

林 そうするとE先生が前期となると、学部は英語。

学生 遅刻とかは・・・後期はF先生で、遅刻をしたら結構叱られたので、出席率は後期の方がよかったんですけれども。

林 それで数は何人くらいだった。僕らの英語と同じぐらいかな。一五、一六人ってところかな？二〇前後、じゃあE先生、F先生というのは割ときつい組合せだけれども、感想はどうだった。両方ともいいから好きなこと言っていよ。

学生 全然違う感じの先生で、前期の方は結構ゆとりっていうか、ゆっくりという感じがあったんですけれども、後期は、話をきいていなくてはいけなくて。

林 非常に好対照だったわけね。なるほど、総体的にどうだった、あってよかったなとか、これはやっぱり堪忍してよという感じだった？

学生 わからないことをよくわかったのでよかったと思うんですけども、ただ先生のやり方がたいくつだったなという、最後にちょっと意見を聞くというのが、ちょっとたいくつだったな。

林 彼女は同じゼミ？皆勤賞としては。

学生 結構前半はよかったんですけども、バトミントンとかやって、後半はちょっと。

林 それじゃあ、Aちゃんうちのゼミの印象いってくれるかい。

学生 後期はあまり出席率はよくなかったで、人が少ないとくるまで待ってるから、やることがないというか、次の時間の予習したりとかもできたし。

林 僕は札大にきて一七年目にはじめて朝一時間目という講義をもって、しかも木曜日朝一時間で、それきりでお終いなんだよ。だから休むとハラたつわけ。朝眠たいのに必死の思いできて、それが終わったら僕はその日仕事がないわけだ。ところが僕の仕事は四五分から五〇分くらい、おいでになる学生さん達を待っているわけ。もう二度とあんなことはないやだけれども、どうなるかね。

そういうこともあるから、実質上時間があまり長くできなかったということもあるね。でもさりとて無理やりださせるわけにいかないし、それから英語科やロシア語科の人は二講目にテストをやられたケースがよくあつ

たようで、経営経済の学生達とちょっと違うんだ。次の時間鬼のテストが待ってるんだ。それが毎週プレゼントなんだ。こういう悲惨な生活をしていると、林先生のゼミの間に一生懸命予習したくなるのも当然で、あまり文句は言わなかったんだけれども、そんな形だけれども、先生どうぞ。

教員 今日来てない、英語のそっちの方を代弁しておきますと、教養ゼミというのは何をやるのか私はよく目的がわかりませんと、こういうのが皆勤三人ぐらい女子いたかな、彼女達は学生生活をそういうふうに住まないでちゃんとやろうという決心のもとにはじめたらしいんで、だから他の科目も本当に休んでいいわけです。そういうふうにしてきた人達にとってはどうもこの教養ゼミは物足りない。教養ゼミというのはのだからものすごい教養を与えてくれるのかと思ったら、文章の書き方とか、変なプリントを読まされたりで、どうもまとまりがつかない。こういう不満を述べてますので、そのことを申し上げておきます。

林 その手の意見はおそらくはじめで比較的良好に出てくる学生から出される意見だろうということは想像つきますね。本当に正面から我々も答えなければいけないんですが、これは担当者の気持ちそのものがまだそろっていないところがありますし、それを受けるサ

イドからすると余計そういうのが伝わっているんじゃないかと思うんですが、やっぱりこれはこういう機会を通して我々自身も学んでいき、それから学生諸君も自分達も一緒に先生と作っていくんだという意識で、やってくる過程で少しずつおそろく五、六年はかかると思うんですが、ある程度形になってくるまで、そういう意味ではなんだかわからないけれども、自分達も参加して一緒にやるというものもなきやいけないんじゃないかという説得のしかたで話をするよりしょうがないんじゃないかと思うんです。つまり我々がおしきせのメニューを与えるまで待っているという姿勢じゃないようにしてほしいんですね。だからこういうことをしたらどうだ、ああいうこともしてほしいというのがあったら出してほしいという形で我々は学生諸君に迫っているわけだから、なかなか簡単にでてこないでしょうし、そういう不満が出てくるんですが、しかしそれはある意味では・・・。

教員 不満ではなくて、それからディスカッションみたいなことを今まではほとんどやったことがなかったんだけれども、そういうようなことをしたのもよかったということですね。

林 確かにこういう席で改めて、例えば注文をつけたり批判をしたりというのは難しいとは思いますが、例えば一年間やってみて

こういうことをもう少ししたらどうかとか、こんなことをしてほしかったというのは具体的にないだろうか。つまり受けた感想というのは今ひとつおり聞いたけれども、それじゃあ例えばこんなことがあってもよかった、こんなことをしてほしかったというのは、君達が考えた具体的な何かというのはないだろうか。

学生 うちのクラスに通して二、三回しかでてこなかった人がいるんですけど、その人の話をきくと、おもしろくない。講義の内容を聞くと、テレビやビデオを見てそれについての感想を来週まで書いてこいという教授の形態だったんですけども、そんなのやってられない。前期二回ぐらいでて質問してたんですけども、議論形式の授業形態だったんですけども、その時にも俺はシャイだというか、人前でそんな発表するのは恥ずかしいとか言って、あまり教養ゼミに対して興味がなかった。

林 ただ教ゼミにほとんどこない人は、他の授業もまったくこないもので、名前と顔しか知らなくて。予定の時間まできたので、他に何かこれだけは先生達にいつておきたいということがあるたら言ってくれ、最後に。

学生 逆に先生方の感想を聞きたい。

林 それじゃそういう形で、ポチポチは出てるんだけど、それじゃあ上原先生から一

つ。

上原 後期経済学部担当の上原です。君達の初めての体験でし、何をやるかというのを悩んだんですけれども、議論、討論になるような題材を自分で持ってきて、それを紹介するというのを何回かやって、コンパをやって、ソフトボールをやってそれから林先生が言った、国語の熟語とか、テストではやりませんでしたが、それをやって、それから一番最後にちょっと文章の改行方法とか、・・・ということをやりました。やっぱり時間をなるべく短くするように、一時間半びったりやる気はなかったんですが、遅刻する人が多いということ、あまりうるさく言わなかったんですけれども、それからあまり長い時間でないけれども緊張感が持続しないなというのが一つ引っ掛かったところです。それから自分の興味がなくてもつきあってでも集中しなければいけない場合というのは、これからおいおい社会で出てくるわけですから、私も、そういう形の今日のテーマはこうだ、俺は興味ない。だから一応話しはしようというつきあいと言いますか、社会的にいえばかなり必要なのだと私は思っておりますけれども、そういう面ではこれしょうが非常に少ないんです。興味のあるときとないとき、この辺がいい意味で大人になってほしいなというのが非常に強く感じました。そういう意

味で教養ゼミは非常にいい場だと思っておりますし、それから結果がすぐ出るとは思っておりません。具体的に成果になるかもしれない気配を感じたのは、教養ゼミナールのクラスの人達が食堂で集まって、来年の科目何とろうかだとかそういう話を十何人集まって話しているところを見まして、これはよかったなという気がしました。二、三人でまとまるのは皆さん上手なんです。その二、三人がどういうタイプかという、高校の出身が同じ奴、その壁が破れば一つの成果じゃないかと考えて、反省すべき点を反省しながらいきたいと考えてます。

高松 経営学部の後期のゼミの高松です。大学でどういうことをやりたいとか、これまどうであつたとか、さしつかえない範囲で書いてくださいということ、書いてたいたんですが、それを読みますと皆さんが何をやりたいかというのが、多様にわたっているわけです。ある人は政治的理念を確立したいとか、教養を身につけたいとか、こういう場合はいいんですけれども、何か特に多かったのが大学の四年間で自分が何をやりたいかというのを早く見つけたというのが多かったようです。希望も関心もまちまちですし、特に熱心な学生さんの方が、そのクラスは月曜から金曜まで毎朝一講目あって、・・・ですけれども、そういうところでこちら専門と申

しましても経営学部とはかなり違ってますし、その点で何をやるうかなと、困ったといまますか、ですからこういう幼稚なことをやって困るという話しは、一方は時間の無駄だとかありますね、それでこちらは五つぐらいのグループに分けてまして、そのグループであるテーマを決めて皆さんで、それを発表する形をとったんです。そこで非常に話すのが好きな方、さっきありましたけれども、好きな方は非常にいいんですけれども、話すのがいやだという方もいますから、そこでまったく話さない方もいらして、先程からでます日本語である文章を読んでそれをまとめるとかやってました。仲間づくりといいますが、グループの中でどこか旅行するとかでできたようです。

林 紹介するのを忘れたけれども、最初にお話くださったのが生物学の上原先生、それから今ドイツ語の高松先生、それから今度は英語の丸川先生。

丸川 私は後期、前期はG先生。私は計画してプログラムを組んでいたんですけれども、はじめ・・・やろうと思つて、英語なんです。英語の文章を訳すと必ず変な日本語になりますね。その変な訳を直す過程において日本語を正しくしていこうと目指したわけです。

それから二、三回本当はもう少し英語をやるうかなと思つてたんですけれども、方針を

変えまして、・・・を要約したり、ただそれをやった段階では多分なんの目的あるのかなと感じたかもしれません。ただ、読んで発表してもらってそれから感想を一人一人全部あてて、本当は自由にいつてもらいたいんだけれども、抵抗あったんですけれども、あてて言わなきゃならないと思うと、結構いろんなことを言ってくれる人がいて、これはよかったんじゃないかな。・・・あてて言ってもらうのも悪いことじゃないなと思いました。あと、コンパとかそういうことは学生さんたちの方から何かあれば、皆さんなかよくやっていったような感じを受けました。

林 それでは由利先生は数学です。

由利 私はずいぶん学生にいたわってもらったなという気持ちです。私はとにかくいろいろな面で自信がなかったの、学生さんに軌道修正はいつでもするから、とにかく毎回毎回やりたくないと思ったんですが、みんななくてくれといつもいつてたんですが、みんなかなりギリギリの段階まで我慢して我慢して、そう簡単に不満を言うなんてほとんどなかったです。みんなが強烈に反応したのは、ただ一回レコード鑑賞でバックに軍歌が流れたんです。その軍歌が流れたときだけ、「先生やめてくれ」って耳をふさいだ。それ以外はみんな我慢してくれました。あの時は大変つらい気持ちだったと思いますけれども、本当に苦し

い顔を見せて、普段は絶対に見せない表情を私は胸にやきついていきます。・・・本当にどうもありがとう。

林 次、鈴木先生お願いします。

鈴木(勇) 先程申し上げましたような事柄を私が具体的にどういうような作業に移していったかということは、省略させていただきます。その作業の過程で私はゼミナールの諸君一人一人と必ず話しておかなければならない。何か前期をご担当の先生方のご意見ではなかなか学生が口を開かないということ承っておりましたけれども、私、経済学部的一年C組の終わりの方の二五人、非常に率直に自分の心を言葉にして聞いてくれるんです。毎回一人一人発言してもらいました。それに

対して私なりの考え方を返すという形で討論を進めていったわけでありますが、その討論の結果としてゼミナリストの一人一人の学生さんが一体何を今必死に求めているのか、どこで、何を苦しんでいるのかということが手にとるようにわかりまして、その結果として、それはもちろんテーマによりましては全員発言したわけでもございませんし、またその他の事情によって相違はありますけれども、総体としては非常に私とゼミナリスト諸君との間の討論は何か私にとっては大変成果があったと思います。その結果として私には論議の性質上、なかなか一人一人の学生さんとお話

しすることができないわけですが、必修ゼミにおきましてはとにかく二五人という学生さんと直に話をするのができ、かつ心をすべてではないにしろ、とらえることができた。その点でそういう作業を通して学生さんと仲良しになったということが、私にとっては非常に感謝している点でございます。そんなところでございます。

林 次は山本先生はドイツ語です。

山本 僕からみて、無駄な時間といいますが、僕は教養ゼミナールで内容的にどうだろうだとおられるかもしれないけれども、僕がもつてたのは経営なんですけれども、前期がA先生で、A先生がプログラムを僕にくれまして、もう少し遊んだりいろいろなことを考えてたんですけれども、僕のみた感じでは、君たちは一年生なんで最初からもてたから思うんだけど、卒業生の中には一回もゼミというものに今までのカリキュラムだと接する機会がなかった学生が結構多いんです。卒業してからこの先生の研究室もたてないというか、必修もとらない。専門についてとれない学生がいる。と考えたら最初から先生たちといろいろな意味で接触をもてることはいんじゃないかと思いました。

林 次、家根谷先生はフランス語です。

家根谷 私は経済学部の後期を担当しました。それで前期がO先生担当だったので、最

初に感想を聞きましたら、とても自由に楽しくてO先生はおもしろい先生でよかったと言うので、非常に最初から苦しい立場だったんですが、しかしなんとか必死に抵抗を試みて、自分がこれまでおもしろいと思ってきたいろいろな本がありまして、その一部をみなさんに毎回次から次と。皆さんの感想がわからなかったんですけれども、最後に聞いてみたら、多くの人がおもしろかったと言ってくれたので、一安心しました。それからもう一つはいろいろな課題を皆さんに書いてもらいました。それで自分もあまり話したりするのは得意じゃないので、そういう人もいるかなと思って、書いたら何か書いてくれると思って、いろいろなテーマで書いてもらったら、思わず本当にいいのがいっぱいありまして驚きました。

文集にでもして残せばと思ったんですが、ちょっと忙しかったので今回は果たせなかったんですが、そういうこともありました。全体としてはむしろ学生の皆さんに迷惑をかけたと思いますけれども、来年からもっと充実していきたいと思います。以上です。

林 次は哲学の鷺田先生。

鷺田 先生方たくさんしゃべるでしょう。これは普通じゃないんです。ほとんどあまりしゃべらないです。しかしこの必修ゼミだけは・・・ただ教師の方が戦闘的にならないとだめじゃないかなというのは僕自身の意

見です。おもしろいとかおもしろくないとか、たくさん学生反応があつて文句を言いますけれども、こちらが戦闘的だと顔をそむけながらもついてくるというか、そういう感じがして、僕は学生の名前は全然覚えられないんですけども、二三人だけは名前と顔が一致して何かあつたら電話くれといったら、二人ぐらい来ました。これからおそろくるんじゃないかなと思います。

林 では締めくくりに部長から。

倉島 私は前期、外国語学部のクラスの後半やったんです。しっかりやってやろうと思つたら、無反応からぶりくらつて、その後ずつとつづいたつてしょうがなくなってきたから、何をやっても反応がない。コンパやろうと言つたら、そんなものはやりたくない、ソフトボールやろうと言つたら、そんなものはやりたくない。次の時間がやっぱり英語かなんかのテストが毎日ある。それで手をあげてしまった。内職しかないんだもの。それでそんなに勉強したいんだつたら、一般のゼミだつたら何か形に残すゼミではないんだけれども、形に残そうと言つて最後四〇ページのバスケットのがあつたから一人二ページずつ訳せ。それでようやくそれじゃあやらなきゃならないのかしょうがないなあという形でやつたら、あの文章がどうだこの文章がどうだつてことになって、この文章が通じるとか通じ

ないとか話になって、少しよくなって、そうやっていいうちに終わつてしまった。だから感想聞くまでもなく終わってしまった。ただ反応がまるで悪かつたな。特に女子が半分いるわけで、ソフトボールもできなきゃ何もできない。かたや運動をやろうと思うと、そんなこといやですという女の子が・・・。コンパやろうという、そんなことするぐらいならバイトにいくよという奴がいる。とても一本にまとまるようなクラスじゃなかったですね。ただたまたまそのクラスが体育講義あたつたんだけれど、そのほうがうまくいくみたい。

鷺田 部長や僕みたいにこわもて派というのは、実はあまり外国語には向かない。本当は僕らみたいなタイプは経営経済の方がよかったわけ。ところがそういう具合にはななかいかなんだな。だからどちらかというとわつとこわもてでいくほうが女の子にあたつちやつてビビるとか、この辺はぼくも工夫しなければならぬと思うけれども、今部長が締めくくってくれたけれども、今までのが大体ぼくらの受けた印象、そして君たちに対してもっている印象なわけだ。これは今年でおしまいになることじゃないので、これから来年君たちはまだ首尾よくとればおしまいだけれども、首尾よくとらなければ三年四年と続く、先生との接触もこれで終わるわけじゃないから、今後君たちは後輩なんかと話を

してて、こういうところはまずいな、自分達の経験を通してこんなふうにした方がいいなと思うところがあつたら、ぼくらの顔を見たら遠慮なく言つて、そしたらぼくらも聞いて

出来るだけやりやすいように変えていくから、そういう知恵をかしてくれたら、またお礼はするから、それでは今日はせっかく春休みのところを申し訳なかつたけれども、わざわざ

出てきてくれて大変ありがとう。またよろしくお願いします。では以上。